

# ひとりぶんの体で——ちんすこうりな詩集評

海老名 絢

ちんすこうりなさんにお会いしたことはない（ちんすこうさんと書くとうもわたしの中で違和感があるので、この詩集評の中では以降りなさんと書かせていただく）。それどころか、第一詩集も読んだことがない。詩誌「Lyric Jungle」で少しばかり読んだことがあるけれど、真剣にりなさんの詩と向き合うのは初めてだ。

詩集評を依頼されて、添付されていた詩集本文のPDFを数編読んでから決めようとしたのだが、冒頭に置かれているその名も「詩」という一編に撃ち抜かれて、書くことを決めた。

その「詩」は短い。短いけれど、凜とした詩人としての姿勢が見えて、詩集全体を支える一編になっている。穏やかながら鮮烈な印象を持った。

全体を読んで思ったことは、この詩集に収められている詩は、りなさんが自分の体ひとつで、全力で世界とぶつかって生まれてきた詩だ、ということだ（もちろん、作中主体・語り手はりなさんと必ずしもイコールではないだろう）。そこには、切実な切なさときみしさがある。

詩集の語り手は、愛されることを求めながらも、自分が愛されることを信じていない。詩集中に、誰かにとってのたった一人になれないという趣旨の表現が二度出てくる（「ちんちん」「スマホのメモ欄」）。さらには、「私には性器しかない」という強烈な言葉も二度出てくる（「おしまいの日」「地元に一軒しかないソーブランドでNo.2だった私の親友」）。

「かけがえのないたった一人になりたい」という切ない希求があるけれども、「私」そのものを愛してもらえないと思う（思ってしまう）ことは、胸が底から冷たくなるような大きな痛みを伴うだろう。

また、「うみべの女の子」は、「人は変わっていくから／誰のものにもできないって知った／でも／思い出にはなれるよ／一緒に笑ったことを／ずっと覚えているよ」という連で終わる。ここでも、誰か特定の相手とずっと共に生きることができないということが示されているように感じる。

それでも、誰かに必要とされたいという気持ちがある。「とにかく必要とされたかった、セックスしているときだけは必要とされていると／感じた」（「地元に一軒しかないソーブランドでNo.2だった私の親友」）。だから、体をわたす。自分の体を差し出すことで、必要とされたいという気持ちを満たしているようだ。体を求められることで、とにかく必要とされたいという焦りにも似た気持ちを埋める。

そしてその行為は、ひとという存在そのものへの愛の示し方のひとつなのかもしれない、とさえ思えるのだ。商店街で土下座している男に出くわし、「私は／ホテル代を払

い／男に体をあけわたす想像をする／／救われるかもしれない」（「始まりや終わり」）と書く。ここの救われる、は男にも私にもかかっている言葉ではないだろうか。この詩の終わりは「出口が見えるまでのあいだ／少しだけいのる」となっていて、通りすがりの光景に「いのる」ということは、ひとの存在を愛しく思っているからこそ出るのでと思う。

タイトルから好色な印象を持つ人もあるだろうが、全く違う。性的な内容も多く描かれるが、生きていくことのさみしさ、切なさ、やるせなさなどが響き、いやらしさや卑猥さはない。

りなさんは体で感じたこと、掴み取ったことを言葉にする力にたけていて、だからこそその切実さが読み手の体にもぶつかってくる。

読後感はずっしりと胸が重たかったが、嫌な重さではない。自分もこうして体ひとつをもって生きている、ということが沁みしてくるのだ。